

## 第4回東北大学歯学会大会講演抄録

日時：昭和58年12月10日午後1:30~4:00

場所：東北大学歯学部B棟第一講義室

### —— 一般講演 ——

#### 1. 角化嚢胞を示した扁平上皮癌の1例——鑑別診断について

大久保勉, Ba Myint (口腔病理)

今回我々は、舌辺縁部に発生した角化嚢胞を著明に示す高分化型扁平上皮癌の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。患者は36歳男性で、既往歴、家族歴ともに特記事項なく、現病歴として3年前に舌辺縁疼痛、2年前に舌硬結増大、本年再び舌腫脹、硬結、潰瘍形成を認めた。全身所見として体格中等度、栄養状態良好であり、局所所見として顔貌は対称性で舌辺縁部に上記の病変を認めた。臨床的に悪性腫瘍を疑い、舌半側切除術が施行された。手術材料の割断面では、病変は粘膜表層から連結的に樹枝状の広がり(35×20×20mm)を示した。病理組織学的には腫瘍実質は索状あるいは島状に増殖し、粘膜表層の重層扁平上皮と連続性を認め、角化嚢胞様構造を呈し、その嚢胞壁に娘嚢胞が多く認められ、嚢胞内容物としてORTHOKERATOSISを示す角化物質が認められた。腫瘍間質は疎ないし浮腫性の結合織からなり腫瘍実質をとり囲むように認められた。以上の所見から毛髪上皮腫と高分化扁平上皮癌の鑑別が考えられた。1978年から1981年の扁平上皮癌98症例から37症例の高分化扁平上皮癌を選び、一方毛髪上皮腫は文献的に考察し、退行性の毛乳頭・毛根、角化嚢胞、線維症、腫瘍実質と間質の人工的空隙、炎症性細胞浸潤、間質の浮腫、腫瘍壊死、潰瘍形成の有無について比較検討した。本症例は角化嚢胞の角化様式と線維症の点で毛髪上皮腫と類似がみられたが、人工的空隙、間質の浮腫、炎症性細胞浸潤、潰瘍形成が認められたこと、および嚢胞形成が粘膜下深部で散在性に認められたことから、高分化扁平上皮癌と診断された。

#### 2. 歯根膜機械受容器における遅順応性ユニットの温度特性

刈田啓史郎, 田端孝義, 青木 健 (口腔生理)

歯根膜機械受容器は、食物の硬さ弁別などの役割の

他に、顎運動の調節にも重要な働きをしていると考えられている。一方、温度に対して比較的鈍感である口腔粘膜は、かなりの高温、低温の食物をも口腔内に保つことができる。本研究は、低温あるいは高温の食物が口腔内に入るたびに、歯根膜機械受容器の機能がどのような影響を受けるかを知るのを第一の目的としている。また、歯根膜機械受容器は、その応答性から従来、4種類の存在が考えられていたが、最近になってただ1種類しか存在しないという報告があらわれた。これを確認するのが第2の目的である。実験にはネブタール麻酔ネコ(50mg/kg, ip)を用い、眼球摘出後、上顎犬歯歯根膜を支配する眼窩下神経の前上歯槽枝から犬歯の機械的刺激(ランプ波状)に反応する単一神経放電を記録した。歯周組織の温度は、犬歯歯髓腔を切削拡大した後、温又は冷のリンゲル液(8℃-45℃)で灌流して変化させた。その結果、歯根膜機械受容器からの反応は全て遅順応性ユニットであった。さらに、それらには、低温(20℃以下)、中温(20℃-35℃)、高温(35℃以上)のそれぞれで最大反応(刺激当りスパイク数)をする3群が存在することを見出した。それぞれは、単にスパイク数だけでなく、その反応の閾値、潜時等においても、温度特性に違いがみられることなどから、遅順応性ユニットの中にも、3種の異なる受容器が存在する可能性が示唆された。これら3種の、温度特性の異なる受容器の存在は、広範囲の温度変化に対して安定した情報を、顎運動機能系へ送る上に役立つものと推察される。

#### 3. うがいによる歯垢pHの回復

星野悦郎 (口腔生化)

笹野高嗣 (口腔診断・放射線)

Sucrose 摂取後低下した歯垢深部pHのうがいによる回復を微小トランジスタ電極を用いて *in vivo* で測定した。義歯内に2片のエナメル質薄片で作った隣接歯間部に電極を設置し、歯垢を1~2日間蓄積させた。初期pHを測定した後、0.1%, 1%, 3% sucrose 液20